

喪服を着た芸妓

紫 李鳥

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

生まれてすぐに母親を亡くした千代は、乳母の佐江に育てられた。十八年後、千代は芸妓になると、松枝の男に近づいた。

6	5	4	3	2	1
20	16	12	8	5	1

目次

松枝が善蔵の後添えになったのは十九歳の時で、先妻の加代が千代を産んですぐに逝去して間もなくのことだった。産後の肥立ちが悪かった加代は、若い身空でこの世を去った。

善蔵の家は先代の暖簾を継ぐ、老舗の酒店で、主の亀吉を亡くした今も続いていた。

亀吉の未亡人、キヨは気丈な女で、亀吉亡き後も如才なく老舗の気品と風格を守り続けていた。

松枝は祇園の芸妓で、一目で見初めた善蔵が水揚げして後妻に迎えた。松枝と入籍し、一緒に暮らすようになって間もなく、善蔵は体調を崩して床に臥せてしまった。

「あないに元気にしとったのに、難儀なことすなあ」
近所の者は、口々に松枝を疫病神呼ばわりした。

善蔵が床に臥してからは、松枝は寢室を別にして、善蔵に付き添うこともしなかった。千代の面倒も怠っていたため、キヨは乳母を雇うしかなかった。

訳ありの子を産んで間もなく里子に出したと言う乳母の佐江は、鞠のように張った乳房を千代に含ませながら、我が子のように接していた。

五坪ほどの中庭には、可憐な秋桜や清楚な小菊が咲き乱れていた。「あんたに来てもらうてほんまに助かってます。おおきに」

庭の花を眺めながら千代に乳を与えている佐江に、キヨが礼を言った。

「奥様、とんでもありません。うちこそこないな可愛い子のお世話させてもらうて、ほんまに感謝してます」

キヨは、佐江のその言葉に、苦労した人間の配慮を垣間見た思いだった。

善蔵の病は一向に本復の気配を見せなかった。主治医の菅井は、不治の病とだけ告げるに留めていた。完治の見込みのない善蔵を、キ

ヨは不憫ふびんに思いながらも、ただ見守るしか術すべがなかった。

一方、キヨの人の良いのをいいことに、程度を逸脱いつたつした松枝は、傍若無人ぼうじやくぶじんに振る舞っていた。日が沈む頃には酒を呷あおり、時には芸妓時代の友達を招き入れることもあった。

そんなある夜。松枝の部屋のどんちゃん騒ぎでキヨは目を覚ました。キヨがいくらお人好しでも、限度がある。到頭とうとう、堪忍袋かんにんぶくろの緒が切れた。

渡り廊下を大きな音を立てて歩くと、松枝の部屋の前に来た。

「松枝はん、うちには病人がおりますんえ。もう少し静かにしてくれまへんか」

障子越しに言った。

「へえ。お義母かあはん、すんまへん。氣い付けますよつてに」

松枝がしおらしい声を出した。ところが、キヨが背を向けた途端とたん、人を莫迦ばかにしたような、松枝と女の下品な笑い声が聞こえた。キヨは足を止めると、大きいため息を吐つき、松枝の部屋に振り返ると、悔しそうな顔で睨にらみ付けた。

善蔵は日に日に痩せ細り、曾かつての澆刺はつちつさはどこにもなかった。

「……お母はん。千代はどないしてます？」

目を閉じたままで訊きいた。

「へえ。元氣にしていますで。連れてきまひよか」

「あかん。病氣移るかもしれへん。……お母はん。俺、まだ二十五やのに、死ぬのんか？」

「何言うてんねん。あんたが死ぬわけあらへん。阿呆あほうなこと言わんとき」

キヨは精一杯に平常心を保った。そして、自分の部屋に入ると、声を殺して泣いた。

一方、松枝はキヨに咎とがめられてからは、外出するようになった。その口実は、華道だった。

「ほな、お義母はん、行ってくるさかい」

しおらしい口調で三つ指をついた。

「……行つといいでやす」

キヨは裁縫さいほうの手を止めず、一瞥いちべつした。

外に男が居るのは、年の功で感付いていた。しかし、善蔵が惚ほれて後妻に迎えた以上、簡単に追いつ出す訳にもいかなかった。

——それは、キヨが寝付いて間もなくだった。善蔵の部屋から呼び鈴が鳴った。キヨは急いで身を起こすと廊下を走った。

障子を開けたそこには、善蔵の白い顔に黒々とするものが、月明かりにあつた。急いで灯りを点けると、それは、口から嘔き出した真っ赤な血だった。

「ぜ、ぜ、善蔵……」

魂消たまげたキヨは、大慌てで菅井に電話をした。松枝は帰宅していなかった。

善蔵の顔や手に付いた血を、キヨは綺麗に拭いた。

「……お母はん。松枝なんか貰うてすまへんかった」

「もうなんも喋りなさんな」

キヨは悔しさを噛み締めた。

菅井が駆け付けた時には、善蔵は既に息絶いきたえていた。キヨは慟どうごく哭なという渦の中で身悶みもたえた。滅多に夜泣きをしない千代が、キヨの部屋で声を上げていた。

善蔵の死を機に、キヨの気持ちは決まった。——松枝が帰ってきたのは明け方だった。抜き足差し足で廊下を歩く松枝に声を掛けた。

「松枝はん、ちよい来てくれまへんか」

その言葉に、ピクツと肩をすぼめた松枝は、ゆっくりとキヨに振り向き、しくじったような戯たわけた表情をした。

すやすやと寝ている千代を横目に、松枝はキヨの前に正座した。

「お義母はん、遅なつてすんまへん。友達ともに遇あうてもうて」

「そんなことどうでもよろしい。……善蔵が死にました」

「えっ……」

目を見開いた。

「単刀直入に言わせてもらいます。善蔵亡き今、あんたはもううちとこの嫁やあらしまへん。そやさかい、出ていってもらいますよつてに」

キヨは冷淡れいたんに言い放った。

「待つとおくれやす。うちは善蔵はんが亡くなつても、この家の嫁どす。善蔵はんの忘れ形見もおいではるのに、出ていくなんてできまへん」

悪びれもせず、松枝は平然と嘯うそいた。

（何と図々しい。この女は一体どないな見りなんや？……金か？）

「出ていってもらうからには、それ相当の金をあげるさかい」

「お金やおへん。ここに居たいんどす。お義母はんや千代のそばに居て、お世話したいんどす」

（何が世話や！いっぺんとして、千代を抱いたこともなければ、善蔵を看みたこともあらへんやんか）

「あんたはんはまだ若いんやさかい、なんぼでもええ縁がおますがな——」

「お義母はん、お願いどす。千代の面倒もちゃんと見るさかい、どうか、ここに置いとくれやす」

松枝は三つ指をつくと、深々と頭を下げた。

結局、松枝を追い出すことができなかつた。そして、それからも、松枝の外出が止むことはなかつた。

そんなある日。松枝に抱かれた千代がけたたましい泣き声を上げた。

「やかましい！なんなのこの子。おつむがおかしいんちゃうん」

途端、放り投げるがごとく、千代を布団に置いた。

買い物から帰ったキヨは、残酷までの松枝のその様子を覗いて、愕然とした。

……千代が殺されかねない。

そのことがあってから、キヨは臥薪嘗胆の策を練つた。そして、松枝を呼ぶと、キヨは作り話を聞かせた。

「千代はおつむに異常があるらしいので、専門の病院に預けることにしたさかい」

キヨのその話に、松枝は残念そうに伏し目がちになると、憂える表情を演出していた。そして、キヨに背を向けた途端、我慢していた含み笑いをすると、嘔き出しそうになるのを懸命に抑えて部屋に戻つた。

——十八年の月日が流れた。田所聡は、友人に誘われて行つた華道の発表会で松枝と出会い、恋仲になって七年を経ていた。

松枝より五つ六つ若い聡は、主導権を握る松枝に手綱を握られていく格好だつた。料亭の離れで逢瀬を重ねながらも、大人同士の関係“を前提に、不即不離を貫いていた。

そんな折、父親の浩一郎に誘われて、久し振りに祇園の料亭に呑みに行つた。

料亭へ月路は、浩一郎の馴染みの店で、女将の秋乃とは長い付き合いだつた。

「社長はん、ご無沙汰どした。本日はおいでくださって、ほんまにおおきに」

紺地に白と黄の糸菊模様の付け下げを着付けた秋乃は、丁重ていちょうに礼を述べた。

「久し振りやったな。野暮用重やぼようなつてな、会いとうても会いに来られへんかった。堪忍かんにんしてや」

恰幅かっぶくのいい浩一郎が小さくなった。

「へえ、許したる。聡はんも、ようおいでくださった。本日は新人の芸子はんが居るさかい、すぐ連れてきますよつて」

秋乃は、聡が来るのを予知していたかのように、そう言つて出ていった。

間もなく、雪見障子が開いた。そこには、雛菊ひなぎくのように清楚で、初々ういういしい芸妓の姿があつた。聡はハツとして、目を見開いた。

「千代菊言います。どうぞよろしゅうお願い申します」

千代菊は三つ指をついて深く頭を下げた。

「おう、こら可愛い。さあさあ、こつちに來なはれ」

上機嫌の浩一郎が手招きした。

千代菊は、長い裾すそをぎこちなく引きずると、聡の横にちよこんと座つた。

「よろしゅうお願い申します」

大きな黒い瞳を聡に向けると、銚子ちょうしを持った。

「ああ。よろしく」

猪口ちよこを手にした聡が千代菊と目を合わせた。

——千代菊に出会つてから、聡は頻繁に〈月路〉に通うようになった。

「千代菊はいくつになる」

「十八どす」

「……十八か。一回り以上も違うな」

聡が憂えを帯びた表情をした。

「やけど、聡はんはまだ二十代にしか見えまへん」

「ハハハ……。千代菊はおだてるのが上手じょうずだな」

聡は満更でもなかった。

「おだててなんかいてはらへん。ほんまに二十代にしか見えへんもの」

千代菊はムキになって、上目で見た。

聡は面食らった。千代菊のその目は、若さ特有のいちぢず一途さのようなものを思い起こさせた。

「……分かったよ。ありがとう」

聡は照れ臭そうに鼻で笑うと、子供を宥なだめるかのような目を向けた。すると、千代菊が白い歯をこぼした。

「……とところで、千代菊はどうして芸子なだなんかに？」

酌を受けながら訊いてみた。すると、突然、注いでいた千代菊の手が止まった。

「……両親早うに亡くなって、遠い親戚に育てられました。……やけど、あんたにかかったお金は、働いて返してもらうさかいつて。……あの家から一日も早う出ていくには芸子なだになるしかなかった……」

千代菊は辛つらそうな顔で俯うつむいた。

「……苦労したんだな」

聡は、我が事のように憂える表情をした。

「……聡はんは京訛なまりがあらへんどすなあ」

ふと気付いて、千代菊が訊いた。

「ああ、大学は東京だ。少し働いていたし。そのせいだろ」

「ほな、うちにも東京弁、教えとおくれやす」

「ああ。けど、僕の東京弁が正しいかどうかは保証できないよ。それでも良ければ」

「うん。それでええ」

千代菊が目を輝かせた。

——最近逢ってくれない聡に、松枝は苛立いらだっていた。焦燥しょうそうに駆かられ、結局、お互いに禁じていた電話をってしまった。

「はい、田所どす」

既に聡の母親は亡くなっている。電話に出た中年の女は、家政婦だと推測できた。

「聡はんは居てはる？」

「どなたはんどすか」

「戸田松枝言います」

「聡はんはまだ帰ってまへんが」

「帰られたら電話くれるように伝えとおくれやす」

「電話番号は？」

「知ってます」

無愛想むあいそうに言い捨てると、電話を切った。

だが、その日、聡からの電話はなかった。益々ますます、松枝の苛立いらだちは募つつた。——翌日、会社にも電話をしたが、同様に不在だった。

……女ができた。

松枝は直感した。

……さて、どないすんか。

結局、探偵社に聡の素行調査を依頼した。——数日後、調査結果の報告書が届いた。

【田所聡氏は、祇園の料亭〈月路〉に頻繁に通っていますが、店を出たあとはまっすぐ帰宅しており、また、その後に出出している形跡はありません。したがって、女性の存在は確認できませんでした】
つたく、へぼ探偵！

松枝は腕組みをすると、苦虫を噛み潰したような顔をした。

その頃、聡は既に千代菊の借金を立て替えて、自宅から目と鼻の先で一緒に暮らしていた。

「今日は、鯛の刺身を買ってきたわ。聡さんの酒の肴さかなにと思って」

割烹かつぽうぎ着姿の千代菊が、不慣れな手付きで大根を千切りせんぎにしていた。

「おい、気を付けろよ。危なっかしいな」

聡がハラハラしながら見ていた。

「大丈夫よ。料理も慣れなきやね。アッ！痛っ」

「ほら、みる」

聡は千代菊の手を持つと、血の付いた人差し指を口に含んだ。

千代菊と暮らす借家には、小さな庭も付いていて、縁側もあつた。和風好みの聡にとつては居心地が好よかつた。

千代菊と暮らすようになってからも、聡は浩一郎に誘われればへ月路つきぢに行つた。それは、千代菊とのことを悟られないためのカムフラージュでもあつた。

そして、会社から一旦帰宅し、勝手口から抜け出して千代菊に会いに行くのも、同じくカムフラージュだつた。

今回の千代菊との件は、口が堅い秋乃を信頼して、内密に進めたことだつた。

そんなある日。浩一郎が聡を社長室に呼んだ。

「戸田松枝ちゆう女を知ってるか」

浩一郎はソファに深く座ると、両切りの煙草たばこを喫のんだ。

「……はい」

聡は面目めんぼくないと言つた顔をした。

「で、どうなってるんや」

「……どうつて？」

口ごもつた。

「頻繁に電話が掛かつてきてるそうやないか。会社にも自宅にも」

「……」

「独身やさかい、女遊びは構わへんが、田所の名を汚けがすような真似はしな」

手厳しく念を押した。

「……はい」

聡には返す言葉がなかった。

……さて、どうするか。逢ったら逢ったで、執拗なまでの情交を求めてくるだろう。……千代菊に出逢ってから、もう松枝に逢う気にはなれなかった。不器用な自分が嫌になるほど、それは、相手が直感できるくらいに露骨に冷遇した。どうすれば、あつさり別れてくれるのか……。

結局、松枝と逢って決着をつけるしかない、聡は思った。

電話をすると、いつもの料亭の離れ家で待ち合わせをした。

待ちわびていた聡からの電話に、松枝は思わず狂喜乱舞した。早速、箆筒を開けると、小豆色に霞模様をあしらった付け下げを選んだ。衿を抜いて、銀色の帯を結んだ松枝の着こなしは、いかにも垢抜けした元芸妓の風格があった。

「もう、いけずやわ。どないしてはったん？逢いとうて堪らへんかったわ」

手酌をしていた聡に抱きついた。だが、聡は反応を示さなかった。

「……どないしたん？なあ、なあ」

寄り掛かると、猫のように擦り寄ってきた。

「……別れてくれないか」

聡が重い口を開いた。

「……やっぱし、女がいてはるんやね」

松枝は一変して、般若のような顔になった。

「大人同士だろ？冷静に話し合おう」

聡は泰然自若と構えた。

「いやや、いやや、いやや」

松枝がさがるような表情で求めてきた。

「悪いが、帰る」

話にならないと思った聡は、松枝の手を払いのけると、腰を上げた。すると、松枝は挿していた平打ち簪を手にした。

「待ちなはれ！あんはんを殺してうちも死ぬえ」

その言葉に、聡は足を止めたが振り向かなかつた。

「……好きにすればいい。俺はあんたの望みを叶えてやれない。だから、あんたの気が済むようにすればいい」

背を向けたままで言った。松枝の手は震えていた。——短い沈黙があつた。やがて、松枝は泣き叫びながら逃げるように出ていった。聡は腰を下ろすと、ぐったりとした。

帰宅した松枝は、失意の中、魂が抜けたように一点を見つめて、その挙動を不審にしていた。

その様子を覗いたキヨは、画竜点睛がりようてんせいのための一芝居ひとしばいを打った。数日後。

「松枝はん。千代におうてもらいますよつてに」

「……千代つて、あの、おつむの病気で、精神病院に入ってる人やん？昔、昔。……そうや、お義母はんのお孫はんどしたなあ」

松枝の言動は不可解だった。

——ドアが開いた病室のベッドで、何やら童謡を口ずさむ長い髪の少女が、あやとりをしていた。

「千代。松枝はんが来てくれたで」

キヨのその言葉に、少女がゆっくりと顔を向けた。途端、

「ヒエーッ！」

松枝が悲鳴を上げた。

白粉おしろいをべったりと塗った真つ白い顔に真つ赤な口紅を塗った少女が、にいーつと笑った。

「あやとりしまひよ。ねえ、あやとりしまひよ」

松枝を誘った。

「ち、ち、ちやうーうちちやう。うちは殺してへん。いやーっ！」

松枝は、訳の分からないことを喚わめいて後ずさりすると、逃げるように出ていった。

そんなある日。聡は浩一郎と差しで話をした。

「……結婚したい人がいます」

聡は真剣な顔つきを構えた。

「千代菊か」

浩一郎がズバリと当てた。

「あ、……はいっ」

咄嗟に浩一郎を視た。

「あかん。嫁に芸子はあかん」

「どうしてですか。田所の名誉ですか」

聡は何年か振りに熱くなっていた。

「そのとおりや。千代菊は妾めかけにしときなはれ。結婚相手は毛並みが良よないとあかん」

頑迷固陋がんめいころうなる浩一郎の偏見が聡は鼻に付いた。

「分かりました。そしたら、田所と縁を切らせてください。それから、

会社も辞めます」

聡は覚悟を決めると、ソファから腰を上げた。

「ちよい待て！本気で言うてるんか」

浩一郎が狼狽えた。

「ええ、もちろん本気ですよ。息子の見る目を信じられない親に、ついて行ける訳がないでしょ？」

聡は理路整然と言った。

「うむ……。勝手にしなはれ」

浩一郎は面白くない顔を見ると、横を向いた。

「三十二年間、ありがとうございました」

聡は頭を下げると、居間から出ていった。

当座の着替えを旅行鞆に詰め込むと、住み慣れた家を後にした。

千代菊との愛の巢に到着すると、何だか旨そうな匂いがしていた。

割烹着に身を包んだ千代菊が、笑みを湛えて迎えてくれた。

「お帰りなさい。あら、旅行？」

提げた鞆を視た。

「……家出してきた。今日からここが我が家だ」

聡は腹を決めた。

「ほんまに？うれしいわ」

華奢な千代菊が聡の首にぶら下がった。

料理は苦手な千代菊だが、料理本を見ながら、聡のために心を込めた。

「すき焼きと、ほたての和え物を作ってみたの」

千代菊は心配そうに、聡の食べる顔を眺めていた。

「うむ……。うまい」

割下が少し甘かったが、不味くはなかった。

「えー、ほんまに？うれしいわ」

「千代菊は、東京弁と京都弁がごっちゃになってしまったな」

「そやかて、折角、聡はんに東京弁教えてもろうてるのに、使わな勿体ないもの」

すき焼きの焼き豆腐を口に運びながら、千代菊が上目遣いをした。

「それは構わないが、なんだか可笑しくてな」

「いけずやわ。もつと上手になるさかい、待つとつて」

「ああ、期待してるよ」

教え子ができたみたいで、聡はくすぐったかった。

一方、あれほど出歩いてきた松枝は、部屋に閉じこもり、独り言を呟いたり、訳の分からない童謡を歌ったりと、小粋だった芸妓時代の面影はどこにもなかった。

キヨは、千代に会わせた時の松枝の言葉が気になっていた。

「うちは殺してへん」

一体、誰のことを指して言ったのか。……まさか、善蔵のこと？ だが、菅井は不治の病だと告げた。

菅井に確認することにしたキヨは、徒歩二十分ほどの〈菅井医院〉へ行つた。〈菅井医院〉は、亡夫の亀吉の主治医で、菅井の父親の代からの付き合いになるが、善蔵の死後は菅井とは会っていないかった。

待合室には誰もおらず、院内は閑散としていた。奥から出てきた菅井は、キヨの顔を視た途端、驚いた顔をしたが、すぐに平静を装って、目を笑わせた。

「ご無沙汰しとります」

キヨが深々と頭を下げた。

「こちら。お元氣そうで何よりです」

当時は黒々としていた髪も、鬢には白いものがあつた。アイロンの折り目がない着古した白衣から、世話を焼く人が身近に居ないことが察知できた。

「……善蔵のことで——」

キヨのその一言で、菅井は向きを変えると、診察室のノブを握つた。

——カルテを捲る菅井に落ち着きがなかった。

「……善蔵はほんまに不治の病やつたんでつしやろか」

「どないしたんどすか？ 今頃になつて」

菅井は手を動かしながら、キヨを見ないで訊いた。

「へえ。なんでか知らへんけど気になるもんどすさかい。……殺され

」

「いえー！不治の病どす」
キヨの話が終わらないうちに、そう、強く断言すると、キヨを睨んだ。キヨは息を呑むと、眼球を覆っていた瞼を上げた。……あの、穏やかな菅井と同じ人間と思えなかった。

「当時の医学では病名が分からなかった。そやから、不治の病とだけ告げたんどす。すんまへんけど、患者はんの予約入ってますさかい」

菅井はそこまで言うと言腰を上げて、キヨに背を向けたまま柵の資料に指を置いた。

「……突然にすんまへんどした。ほな」

菅井の背中に挨拶をした。

……あの、狼狽えぶりは何だ？……善蔵は殺されたというのか？

……一体誰に？仮に殺されたとしたら、菅井はなぜ、不治の病と診断したのか？もしかして、誰かと共犯なのだろうか……。

信じていたものが、音を立てて崩れた。不安と戦慄の中で、キヨは激流に呑み込まれた思いだった。

真新しい布団の中で、傍らかたわに寄り添う千代菊の洗い髪の毛の匂いか臭きながら、聡はその思いを口にした。

「……夫婦めおとにならないか」

「えっ?」

千代菊が驚いた目を向けた。

「ここで、所帯を持つとう」

千代菊は嬉しかった。だが、複雑な胸の内を明かせないのが苦しかった。

「……うれしいけど……」

「けど、なんだ?俺じや駄目か?」

「ううん。聡はんは素敵な人や。けど、うちなんかあかん。聡はんにはもっとお似合いの人がいてはる」

千代菊は涙を堪えた。

「……何か、隠しているのか?」

「堪忍しておくれやす」

背を向けた。聡は千代菊の肩を持つと、自分のほうに向けた。

「お前が、貧乏人の娘でもなければ、借金のために芸子になった訳でもない。そんなことぐらい分かっていたさ。貧しい生活をしてきた人間が、平気で鯛の造りや牛肉を買わないからな。それは、食べ慣れた人間の習性がさせる自然の行為だ。つまり、お前は贅沢ぜいたくを極めた生活をしていたと言うことだ。……どうして、嘘について俺に近づいた?」

「……」

聡は、目を伏せて齒を食いしぼる千代菊を見つめた。

「千代菊、答えろ!」

千代菊の肩を揺すった。

「堪忍しておくれやす。……言えまへん」

「目的はなんだ!若いお前が体を張ってまでして俺に近づいたのはな

「ぜだ？」

千代菊は泣いていた。聡は、千代菊の涙を指で拭ってやると、大きくため息を吐いた。

「……お前を責めてる訳じゃない。真実を知りたいだけだ」

千代菊から手を離すと、仰向けになった。

「……松枝を苦しめるためどした」

背を向けたままで言った。

「！……何っ？」

千代菊の黒髪に顔を向けた。

「……松枝は、うちのお父さんの後妻どす」

「！……」

聡は、千代菊のその一言で、自分に近づいた目的を理解すると、困惑の面持ちで長大息ちようたいそくをした。

そして、千代菊こと千代は語り始めた。

「松枝のことを祖母から聞かされたのは、私が十六のときどした。松枝はおとんが病気で苦しんでるのに、看病もしひんで外出ばかりしとったそうどす。おとんが亡くなったときも家にはいーひんかった。おとんが亡くなっても籍を抜かへんかった。

松枝の目的はうちとこの財産やと思た祖母は、うちの身に万一のことあるかもしれへん思て、乳母の家に預けたんどす。乳母の家はうちから歩いてすぐのとこやったさかい、毎日のように祖母が遊びに来てくれました。

うちは乳母の家で何不自由のう育てられました。……祖母から松枝の話聞いたうちは、松枝を憎んだ。松枝を苦しめるためにどうしたらええか、考えました。

ほんで、高校を卒業すると、復讐するために松枝の身边を調べました。すると、頻繁おに会うてる男がいてはった。……それが、聡はんどした」

「……」

聡は俯うつむせになると、煙草たばこに火をつけた。

「うちは思た。愛する人を奪われたら、松枝は悲しむやろうなど。そ

「こで今度は、聡はんを尾行した」

「……」

「すると、頻繁に〈月路〉に通ってるのを知った。復讐方法を考えてると、乳母から意外なことを聞いた。〈月路〉の女将はんと知り合いやっただんどす。乳母の口利きでにわか芸子になると、聡はんを奪う計画を立てたんどす」

「……」

聡は煙草をもみ消した。

「計画どおり、聡はんにはかされた松枝は、あまりの悲しみで気が触れんばかりになってもうた。松枝の様子は、祖母から伝った乳母からの情報で知ってました。」

「ほんで、最後に松枝の精神をおかしゆうするために、祖母の知人の精神病院で、真っ白い顔に真っ赤な口紅を塗って、うちがアホの真似をしたら、松枝はほんまに氣い変になってもうた。」

「……聡はんと引き離して、松枝を苦しめれば、うちの復讐は終わります。おとんの無念も晴らすことできた。……そやけど、聡はんを愛してもうた。離れられんようになってもうた」

「だから、結婚しようと言ってるじゃないか。こつちを見てごらん」

その言葉に、躊躇ためらいがちに向きを変えた千代は、目を伏せていた。

「……目的はともあれ、今はこうして互いに愛し合っているんだから、それでいいじゃないか。な？」

千代はゆっくりと、聡と視線を合わせた。そして、笑顔になった。

「ええの？ほんまにうちでええの？」

聡の胸にすがった。

「ああ。お前じゃなきや駄目だ」

千代を強く抱き締めた。

「……聡はん」

その頃、聡という片腕を失った浩一郎は、仕事に支障を来していた。どうしても引き戻す必要があった。聡の居場所を知るには、秋乃に訊くしかなかった。

江戸紫の付け下げに平安絵巻調の帯を、秋乃は粋に着こなしていた。

「単刀直入に訊くが、聡の居場所を知らんか」

「そんなん訊きに、わざわざおいでになったんどすか？電話一本で済むやないどすか」

酌をしながら皮肉を込めた。

「あんたにも会いたかったさかいだ」

「おおきに。そやけど、聡はんの居場所は簡単には教えられまへん。聡はんとの約束どすさかい」

「そんなん言いなや。わしとあんたの仲やないか」

「えらい昔のこつちやあらへんどすか。うちを脅おどす気どすか」

「そないにいじめなや。どないしたら教えてくれるんや」

「さあ、どうしまひよ」

横を向いた。浩一郎は秋乃の手を握ると引つ張った。

「痛っ。なんどすの？」

「ええさかい、こつちにおいで」

「いやや」

「ええさかい」

「……いや」

綱引きのように引つ張られた秋乃の体は、浩一郎の胸元で止まった。

松枝の容態ようたいは日毎ひごとに悪化あくわしていた。髪を乱し、着崩れしただらりの帯で、家の中を徘徊はいかいしていた。その日も、裸足で庭に入ると、菊に鼻先を近付け、匂いを嗅いでいた。

「桃色の花はめんこいな。うーん、ええ匂いやわ」

そう言つて薄桃色の小菊を手折たおると、髪に挿さした。

「お義母はん、どや？ 似合つてます？」

障子を開けた部屋で裁縫ざいほうをしているキヨに話し掛けた。

「……へえ。よう似合つてます」

キヨはそう答えながら、踊り子のように舞っている松枝を哀れに思つた。

（そろそろ、入院させたほうがええ。……その前に、菅井のこと訊いてみよう。こないな状態では、まともな回答は得られへんやろうが）

「……松枝はん。菅井先生を知つてはるか？」

「……すがい？……ああ、お医者はん。うちが芸子のころ、よう遊びに来てくれはったわ」

（！……繋がつた。松枝と菅井が繋がつた）

「善蔵のことは？」

「ぜんぞう？……」

「亡くなつた、あんたの夫や」

「！うちやないっ！殺したんはうちやないっ！」

松江は取り乱すと、汚れた足で廊下を走つて行つた。その度に揺れるだらりの帯を見ながら、キヨはこう推測した。松枝にぞっこんだった菅井は、松枝の言いなりになり、善蔵に毒を盛つた。医者なら、薬を使つて生かすも殺すも自由にできる。……何のために。——遺産を手に入れるためだ。だが、それは推測に過ぎない。ましてや、善蔵がこの世を去つてから長い年月を経た今、それを証明することはできない。キヨはため息と共に肩を落とすと、項垂うなだれた。

その夜、愛の巢に予期せぬ来客があった。それは、土産を提げた浩一郎だった。

「……お父さん」

聡が驚いた顔をした。

「入らしてもらうで」

浩一郎は勝手に入った。

「……社長はん、おいでやす」

千代が三つ指をついた。

「千代菊、元気どしたか？ 上がらしてもらうで」

革靴を脱いだ。

「へえ、どうぞ。散らかしてますけど。今、お茶を淹れますよって」

「茶はいらん。酒にしてくれ。人肌の爛や。寒うなったさかいな。

ガツハツハ」

浩一郎は豪快に笑った。

「へえ。つまみも作るさかい、座っておくれやす」

押入れから座布団を出した。

「寿司も買ってきたで」

ちやぶ台に置いた。

「おおきに」

千代は礼を言いながら、割烹着を纏った。

聡は諦めたようにため息を吐くと、浩一郎の前に腰を下ろした。秘密にしていた愛の巢を教えたのが誰なのかは、言わずと知れた。浩一郎を見ると、悠然と煙草を喫んでいた。

「なんの用だよ、突然に」

聡は無愛想に言った。

「親が子供のどこに来たらあかんのんか？」

「親子の縁を切ったんじゃないのんか？」

「わてはなんも言うてへん。あんたが勝手にほざいた台詞やあらへんか」

「……それで、なんの用だよ」

聡は苛立っていた。

「そないに慌てな。酒呑みながら話すさかい」
「……」

聡は横を向いた。

「社長はん、おまちどおさまどす」

千代が徳利と猪口を運んできた。

「おお、白い割烹着がよう似合うてますなあ」

浩一郎が褒めた。

「えっ、ほんまどすか？おおきに。うれしいわ」

千代も調子に乗っていた。聡は一人、愉快ではなかった。

「ほな、どうぞぞ」

千代が酌をした。

「おう、こらあ、うれしいな。聡、あんたも呑みなはれ。いつまでもそ
ないな^{ぶつちようぶち}仏頂面してへんで」

これ以上の口論を避けたかった聡は、仕方なく猪口を手にした。

「千代菊も呑みなはれ」

浩一郎が勧めた。

「社長はん。うち、まだ未成年どす」

「……そやったな。すまんすまん。ガツハツハ」

浩一郎は高笑いしながら、責めるような目を聡に向けた。「お前が
嫁にしたいという女はまだ未成年なんだぞ」そんなふうに言われてい
るようだった。「じゃ、そう言うあんたはどうなんだ？芸子は妾にし
ろと嘯いた^{うそぶ}じやないか。あんたに俺を責める権利はない」と、聡は腹
の中で反論した。

千代が作った夕飯の余ったおかずをつまみにしながら、^{あしおんち}味音痴の浩
一郎は旨そうに酒を呑んでいた。——その時だった。突然、浩一郎が
話を変えた。

「千代菊はん。あんた、かの有名なへ戸田酒造のお嬢はんやったんど
すなあ？」

「えっ？……えええ」

千代は小さく返事をして、俯いた。

「聡、なんで最初に話してくれへんかったんや。それを知つとつたら

結婚を承諾してましたがな」

聡を見ながら、白菜の漬物を口に入れた。

「また、あんたの言う、毛並みか？家柄で結婚する訳じゃないだろ。それに、あんたに話した時は、千代菊のことはまだ何も知らなかった」

「戸田千代はんや」

浩一郎が即答した。……千代菊の本名を浩一郎の口から聞かされるとは思わなかった聡は、自分が知らない千代のことを知っている浩一郎に腹が立った。傍らの千代が、申し訳ないと言うような目で聡を見るところに視線を落とすとした。

「で、式はいつにする？」

浩一郎のその言葉に驚いた聡と千代は、同時に目を合わせた。――その夜、菅井が自殺をした。遺書はなかった。

翌日、キヨに結婚の報告をするために、千代は聡を伴って実家に赴いた。

「お祖母ちゃん！」

千代の声に、キヨが急いで廊下を来た。

「千代、よう来てくれた。元気にしとったか？早う入りなはれ」

千代の腕を握った。

「……聡はんも来てはる」

口ごもった。

「……しゃあない。呼びなはれ」

キヨは、松枝の男だった聡に好意を持っていなかった。

「聡はん」

千代の声に、聡が玄関から顔を出すと、深々と頭を下げた。

「挨拶はあとや。さあ、二人とも中に入りやす」

キヨは忙しく手招きした。そして、居間に行くと、松枝の様子を話して聞かせた。

三人が松枝の部屋まで行くと、何やら童謡が聞こえてきた。

「松枝はん、開けますえ」

障子を開けたそこには、髪を乱した松枝があやとりをしていた。

「松枝はん」

キヨの声に振り向いた松枝を見て、三人は一斉に後ずさりした。真っ白い顔に真っ赤な口紅を塗っていたのだ。それは、千代が精神病院で演じた白痴はくちを彷彿ほうふつとさせた。だが、松枝は演じている訳ではなかった。

「あつ、聡はんや。逢いに来てくれはったん？うれしいわ」

抱きつこうとした松枝を聡は避けた。すると、松枝はよろよろと廊下に倒れた。

「……そないにいじめんといて。殺したんはうちちやう。……あらつ、千代がおる。なんで千代がここにおるん？千代はおつむがおかしくなつて病院におんねん。……そうや、あやとりしまひよ。なあ、あやとりしまひよ」

松枝は徐おもむろに立ち上がると、指に赤い糸糸を絡からめて、千代に歩み寄ってきた。千代は聡の後ろに隠れた。

「アハハハハ……」

松枝は笑い声を上げると部屋に入り、背を向けて横座りをした。そして、何やら童謡を口ずさむと、一人であやとりを始めた。

三人は目を合わせると、言葉にできないそれぞれの科とがを内に秘めながら、松枝の背中に憐憫れんぴんの眼差しまなざしを向けた。——間もなくして、松枝は精神病院に入院した。

金太郎のよだれかけをした赤子を抱いた千代が、聡を伴ってキヨに会いに来たのは、庭の山百合やまゆりが芳香を放つ頃だった。——

完